

倉橋由美子文芸賞 選評

〈 波戸岡 景太 〉

屈託という言葉がある。ふつうは「屈託のない」と否定のかたちをとるのだけれど、こと小説に関していえば、作家がみずからの「屈託」をどれだけ客観的に物語化できるかが勝負となってくる。ひとつのことをくよくよと気に病むとき（すなわち、「屈託がある」とき）、人はたいがい、終わりのない自問自答を繰り返している。そのネガティブな言葉の永久運動を冷静に観察し、これの構造や意匠を紙の上に再現できたとしたならば、あなたの文章はすでに小説になっているはずなのだ。

大賞に選ばれた「とぼそ」は、「屈託をすくいあげる技術」とでも呼ぶべき力が、応募作の中でもダントツに高かった。あまりに青臭い主人公ヤスの白昼夢を、鮮やかな赤のイメージで塗り込めていく手際も見事であった。また、「人間はみな、赤色の恐怖に耐えられないから信号無視をするのだ」というまったくのナンセンスを、思わぬタイミングで投げ込んでくるところにもセンスを感じた。もちろん、本作のような語りは、技術に頼りすぎると単なる「奇譚」となりかねないので、注意が必要である。屈託を大事にしつつ、もっと大きな物語にも挑戦して欲しい。

佳作となった「明日のペリペティ」の場合、小説を書く技術そのものは低くないものの、作者がいまだ、みずからの屈託の正体を見きわめられていないように思えてならなかった。本文中には、映画『ファイト・クラブ』への言及もちらりとあったが、せっかくの機会なので、原作小説（チャック・パラニューク著『ファイト・クラブ』）からも、もっと多くを学んでいただければと思う。同じように毒を含んだモノローグであっても、パラニュークの語りは、サービス満点だ。なにも、読者に媚を売れというのではない。そうではなくて、あなたの小説を読んだ人が、そこからながしかの発見や情報を得られるような工夫が必要なのである。主人公は最後、「ナンセンスなものであってもそれが起こるとわかっていればそこまで身構える必要はない」と達観してみせるが、次回作はぜひとも、最後まで読者を慣れさせることなく、自身の屈託を「屈託なく」語りきってもらえたらと思う。

〈 生方 智子 〉

応募総数は 本。今回は、日常から乖離した物語世界を設定し、その世界の内側で生じる出来事をひたすら語るというタイプの作品が目立った。ゲーム的なダンジョン世界をさまよう物語、魔物や勇者が現れる街の物語、神話的な ムラ の物語、森の中で熊と格闘する男の物語といった読み物は、読者に何を伝えるのか。物語世界が私たちの生きる現実に直接関わることのない、ものであるために、それを目の当たりにした読み手は物語世界を前にして困惑するだけである。ゲームであれば閉じた世界の内部を探求することがプレイヤーの喜びとなる。しかし、小説では、読者に向けて小説世界が<開かれて>いる必要がある。そうでなければ、読者はその世界に入ることができず、その世界を生きることを理解できない。

では、読者に向けて<開かれて>いる作品とはいかなるものか。今回も、初恋をめぐるエピソードや教室やサークルの中での人間関係といった日常を綴った作品も見られた。いずれも<狭い世界>の出来事に終始しており、未知の世界へと読者を誘うことがない。そんな中で、植物系男子として大学生活を地味に送っていた主人公が、ある朝、部屋の植木鉢の中のサボテンと体が入

れ替わり、サボテンとなっていていつもの東京の風景を散歩することで新しい世界の様相を体験する「東京サボテン」に好感を持った。ただし、描かれる世界に悪意が全く存在せず、<ちょっといい話>に終始したのが惜しまれる。

今回受賞作となった「明日のペリペティ」は、いたずらに銜学的で自意識過剰の語り手「私」が、そのような自分自身に溺れることなくユーモアと余裕をもって自身の大学生活を語る。語り手の設定が絶妙である。読者は「私」と一緒にリバティタワーや錦華公園を歩いているうちに、次第に日常が歪んで異常な世界に連れ出されていく。さらに、歪んだ世界を真正面から描いたのが「とぼそ」である。「とぼそ」は幻視する主人公を設定し、百日紅の木や絵画の表象といった視覚イメージの描写を重ねることで、閉ざされた部屋に籠る主人公の感覚世界の拡張を描いた意欲的な実験作となった。

〈 渡辺 響子 〉

今回初めて倉橋由美子文芸賞の審査員となり、応募作二十六本を期待と好奇心をもって読んだ。

大別すると、日常に材を取った等身大の作品と、ファンタジー的である意味壮大な世界を描いた作品とに傾向が分かれたと言えるだろう。

前者は、よく言えば軽やか。大きな破綻もなく心地よく読み進められる。が、小説が本来持っているはずの生々しさ、絡め取られるような粘りのようなものが感じられない。時代とともに小説も変化するのは当然だが、そういう意味での斬新さが十分見られるとは言えず、文体を崩して新しいスタイルを構築するまでには至っていないのが現状だ。句読点の打ち方が気になる作品も多かった。十九世紀の作家のように周囲の人間に聴いてもらうのが叶わないとしても、自分で音読をしてみることは大切だと思う。文章のリズム、音感を大事にしてほしい。また、文章は視覚的な要素も重要なので、漢字とカナのバランスなどにも気を配ることが望ましい。変換ミスや助詞の使い方も気になったが、これはより丁寧に推敲することで軽減できるだろう。

移民やいじめ、無戸籍、気候変動など社会的な問題を取り込んでいるものも少なからずあった。意欲は評価するが、残念ながら、自分のものとして消化しきれていると言うにはあと一歩及ばない。より一層の努力が必要だろう。

その中で受賞作の『とぼそ』は、無理に整合性を追求せず、非現実的なイメージを転調のようにずらしながら展開していき、独特の個性を発揮した点を評価したい。物語性を強いてぎこちない終わり方をするよりも、多少独りよがりであっても「ことばの戯れ」に徹した点がよかった。書き慣れていて文章もうまい。作品の完成度だけを見れば、他の応募作より高いわけではないかもしれないが、可能性を感じた。

『明日のペリペティ』は、おもしろい設定で、全体的に安定感もあるのだが、やや頭でっかちの読後感が残る。読書量が多く、さまざまな表現や知識があるのがわかるが、それが効果的に使われておらず、むしろ鼻について逆効果になってしまっている場合もあるのが残念だ。

受賞に至らなかった作品も含め、今後を期待する。